

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:070-1503-6401/044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第154号

多摩丘陵に残る
 義経の面影 - 15

稲毛三郎重成と源義経 (その1)

麻生歴史観光ガイドの会名誉会長 松本良樹

この稲毛三郎重成という人は、武蔵国で最大の武士団として君臨した秩父氏の一族で、そのルーツは平安京に遷都した桓武天皇の第5皇子葛原親王の子孫 平高望が上総介となって関東に下向し土着、その子孫たちが国司となって繁茂していった中で秩父党と言われ、重綱の代では武蔵国留守所検校職に就き、武蔵国の在庁官人のトップとして国内の武士を統率・動員する権限を持ち、一族は大いに発展しました。

秩父重綱の長男 重弘の子供には長男重能と次男有重があり、長男重能は現在の埼玉県嵐山町に居住し畠山と名乗ります。一方次男有重は現在の町田市大泉寺に居住し小山田と名乗りました。この小山田有重の息子に三郎重成があり、現在の多摩区広福寺に居住し稲毛三郎重成と名乗り、源頼朝の御家人として稲毛の荘(高津区・中原区の辺り)の荘園領主として栄えました。

時代を少し遡り、平治の乱(1159年)の時、秩父一族は源氏方の義朝に従って戦いますが、平清盛に敗れ、源義朝亡き後は、平氏政権の番人として生きる道を模索していました。源頼朝が平氏追討の旗揚げをした治承4年(1180)8月、秩父一族は平氏方として頼朝に刃向かいますが、頼朝が真鶴から房総に逃げ、体制を整えて隅田川の長井の渡し(現在の白髭橋あたりか)まで来た時に、秩父一族は頼朝に帰服し、以後 御家人として東国に下向し再起を図ります。稲毛の荘園領主 稲毛三郎重成は、多摩丘陵に所在した、現在の多摩区広福寺がその館跡と言われており、枳形山に枳形城を築城したと言います。同族である畠山重忠とは親が兄弟同士なので従兄弟になります。

稲毛三郎重成は頼朝の直属の部下でしたが、平家を倒すことに固執していた義経は、兄の今若のいた多摩区の妙楽寺と広福寺が近いため、弓の名人であった先輩重成を訪ね、戦の基本について語りあったのではないかと想像されるのです。

さて、この三郎重成には色々なエピソードが残っていますのでご紹介いたしましょう。

1. 長井の渡しから東国に入って間もなく、頼朝の正室 政子の妹を妻に迎えています。従って頼朝とは義兄弟の仲で有力御家人でありました。この結婚式は盛大なもので、この時唄われた祝い唄が今でも残っており『これさま』や『初瀬』などはその代表とされています。これらの歌は現在でも、おめでたい時などには歌われているそうでもあります。

2. 義経が自害した文治5年(1189)4月の後、奥州藤原氏討滅のために頼朝は動きますが、8月には泰衡を亡き者にし、凱旋します。この戦いにも稲毛三郎重成は参加しており手柄を立てたと言われています。

3. 義経自害から6年後の建久6年(1195)稲毛三郎重成は、頼朝の再上洛に随行し、その帰路 美濃国で妻の危篤を知らされますが、頼朝より駿馬『三日黒』を下賜され急ぎ本領へ戻るも、死に目には会えたものの、間もなく逝去、妻の病没を悲しみ出家して法名を道全と名乗り、以降 稲毛道全、小沢入道と呼ばれました。

4. この後、妻の菩提を弔うため重成は、多摩区の菅に極楽寺を建立します。現在では薬師堂しか残っていませんが、この薬師堂で舞われる『菅の獅子舞』は、平成13年に神奈川県無形民俗文化財に指定されました。この舞は薬師様の命日である9月12日に近い日曜日に薬師堂境内の土俵で舞われます。五穀豊穰、疫病退散を祈って古くから獅子舞が行われていたようで、雄獅子(オジ)、雌獅子(メジ)、臼獅子(ウヅジ)、と天狗(テウ)の四人で舞う1人立3頭形式で、これに笛と唄が付きまします。これなども、唄の『これさま』『初瀬』と同様830年後の今日まで続く貴重なもので、現在でも観客が大勢見物に来ています。(本項つづく)



菅の薬師堂



菅の獅子舞

鶴見川流域の中世
その14

県下最古の板碑

◆寛元二年銘板碑等と御家人鴨志田氏について◆

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橋樹研究会会員)

横浜市青葉区鴨志田町字念仏堂の集合墓地に所在する寛元二年(1244)銘板碑は、神奈川県下で最古の板碑である。この板碑は埼玉県秩父地方に産する緑泥石片岩製の武蔵型板碑の中でもごく古いものである。また、同墓地には建長七年(1255)銘板碑をはじめ多くの板碑が存在する事も見逃せない。

寛元二年銘板碑の現状は覆屋に納められて、石で造られた枡形の中に立ち周囲にはこぶし大の川原石が敷き詰められている。地上高 133 cm、上幅 47.5 cm、下幅 52 cm、厚さ 8 cm。頭部山形の下に二条線はなく羽根刻を刻み、阿弥陀種子を表すキリークが塔身部の約二分の一を占める大きさに刻まれている。蓮座は刻まれている。塔身部右側に寛元□□、左側に□□日と紀年銘を刻む(1970年代後半に齋藤慎一氏と一緒に調査した時には寛元第二年とかすかに読めたが、風化が進んでいる)。大きさ、厚さ、主尊の塔身部に占める大きさと言いまことに申し分のない初発期板碑である。中世には寺家から鴨志田にかけて鴨志田郷と呼んでいたが、鴨志田郷の領主鴨志田氏に相応しい堂々とした供養塔婆である。

鴨志田十郎と称する武士が源頼朝の御家人にいたことが『吾妻鏡』に記されている。『吾妻鏡』建久元年(1190)十一月七日条の源頼朝上洛の先陣随兵八番に大井実高、高麗実家とともに列している。また、同建久六年(1195)三月十日源頼朝の東大寺供養の供奉人として先陣随兵七番に阿保六郎、青木真直とともに列を組んでいる。大井実高は品川氏の一族、高麗実家・阿保六郎・青木真直はともに武蔵七党と言われた丹党の武士である。隊列は一族などの由緒を同じくする武士同士で組ませる事があるので、鴨志田十郎が丹党の武士団と何らかの所縁があるのかもしれない。隊列を組んだ武士がいずれも武蔵国出身の武士である事。また、名字の地である鴨志田郷は武蔵国のなかでは都筑郡の鴨志田郷以外に存在しない事などから、『吾妻鏡』に出てくる鴨志田十郎は鴨志田郷の武士として間違はない。

丹党の武士団と隊列を組んでいる事と関連して、建長七年板碑に注目したい。この板碑には阿弥陀種子を表すキリークが大きく刻まれている。このキリークは独特な形態をしている。これと同じキリークが埼玉県川島町西見寺に所在することから、板碑研究者の磯野治司さんはこの形態のキリークを西見寺類と命名している。以前から川島町西見寺と同じ形態のキリークが鶴見川流域に存在する事に疑問に思っていたが、磯野さんの論文を読み返してみると、西見寺類の板碑分布はなんと丹党の武士団の分布と重なるではないか。先ほど見た『吾妻鏡』に記された鴨志田十郎と隊列を組んだ武士は丹党の武士団であった。これでようやく謎が解けた。鴨志田十郎は丹党の武士団と所縁のある武士である可能性があり、その関係で丹党の武士団が用いた埼玉県川島町西見寺のキリークと同じ形態のキリークを鴨志田の地にもたらしたのであろう。

集合墓地に近い甲神社の丘に立って見ると、谷本川が岡上町の東側を回り込んで真光寺川・麻生川などの支流を集めて、さらに左岸から真福寺川は王禅寺の谷から湧き出る小川を集めて水車橋で合流し、寺家橋付近では右岸の寺家・鴨志田の小流が合流している。そのような川の働きによって上麻生から鴨志田にかけて小さな沖積低地が形成されて、早野子の神古墳・寺家古墳などの古墳群や多数の横穴墓群が造営されるなど、早くから開発が進んだ地域である。寛元二年銘板碑はこの小さな沖積低地を望む台地の字念仏堂に所在する。周囲の地形は開発によって変貌しているが、今でも「子供の国」の東側の谷を水源とする小流は約 1.5kmにわたって寺家の谷戸田を潤している。これらが鴨志田郷の基礎となる景観であろう。

さて、もう一つ謎がある。これほど大きな板碑が江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』に記載されていない事は不思議であった。考古学研究者の坂本彰氏は 1930 年代には板碑は立っておらず碑面を下向きにして雑木林の中に横たわっていたことを突き止めて、『新編武蔵風土記稿』に記載されなかったのは、板碑が横転していた故であろうとしている。

板碑をただの石と思わずに注意深く観察して文献と突き合わせてみると、思いがけない事実が解ってくる。



図1. 寛元二年銘板碑拓本



図2. 建長七年銘板碑拓本

(つづく)

シリーズ
教育の歩み 第3部

日本の学校と教育(10)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆柿生地域の初等教育 その3◆

ここで下麻生学舎、後の下麻生学校の誕生時の様子をひも解いてみましょう。明治 5(1872)年の文部省の調査結果をまとめた『文部省第一年報』は、この年早野村の落合四郎兵衛が男児 50 人、女児 20 人に教えていたこと(落合塾)、同じく王禅寺村の青戸桂之助(後に四郎右衛門と改名)が男児 35 名、女児 15 名を教えていたこと(青戸塾)を明記しています。続いて明治 7(1874)年刊行の『文部省第二年報』は、青戸塾と落合塾の塾生たちを中心に、明治 6(1873)年に下麻生学舎が設立されたと記しています。第二年報は、就学生徒数を男児 34 名、女児 12 名の 46 名、教員を 2 名と記しています。

下麻生学舎は、王禅寺、下麻生、早野の 3 ヶ村の子ども達のために設立された学校ですから、上記 2 つの塾の塾生たちと、勧学人に説得されて学校に通うことにした塾未経験の子供たちを加えて 46 名という生徒数は、少なすぎるように思われます。早野の落合塾には、隣接する現横浜市青葉区の鉄(くろがね)村や寺家(じげ)村の子ども達も学びに来ていましたが、その子たちは鉄村に設立された鉄学舎に入学することになり、下麻生学舎には来なくなったためでしょうか。

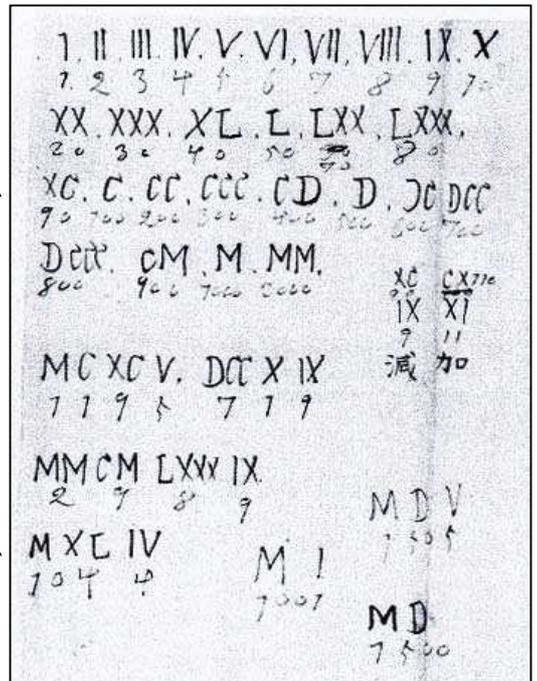
大正 2(1913)年 4 月作成の『都築郡尋常下麻生小学校沿革誌』は、設立当時の様子を「下麻生、王禅寺、早野の三村落連合協議の上、初めて学堂を開設するに至れりと雖も、児童を收容するの校舍もなく、器械器具の一つとして整うものなければ、下麻生村不動院の堂宇を借り受け、児童は各自机を持参して恰も寺子屋的の教授を開始したりき。学科は読書、算術、習字の三科目にして、教員は当時に至るまで児童を預かりて僅かに、読書、算盤を授け来たりし所謂寺子屋師匠たりし、青戸四郎右衛門、森長左衛門の二氏を聘して授業を委託せり…」と記しています。

ところで前号の最後に記したように、寺子屋の師匠から下等小学校の訓導(先生)に転じた教員たちが、『教則』(現在の学習指導要領にあたります)に従って授業を進めるにあたり、最も苦心したのが洋式算の修得でした。当時の文書は次のように記しています。「当時の教員が最も苦痛に感じたるは……小学校に洋算を課するにありき。未だ嘗て見もし聞きもしことなき、数字を取り扱ふて全ての運算を為すにあれば、算盤のみを取り扱いて教授し来る寺子屋師匠には、一方ならぬ珍奇の感を起こさしめなるべし…」と。この記述は全国各地の寺子屋師匠から横滑りした教員に共通の悩みで、柿生地域の教員も同じでした。初期の下等小学校教員に、半年ないし1年で職を辞す教員が比較的目立つのは、おそらく洋式算の修得に馴染めなかったこともあったのではないのでしょうか。

そうした中、熱心に洋式算の修得に励んだ教員が、下麻生学校の青戸四郎右衛門先生でした。青戸先生は他の先生方と同様、夏休みに東京で開かれた洋式算の講習会に皆勤し、講習会終了に際してなお自らの学びの不十分さを自覚し、個人指導を引き受けてくれる数学者について、納得のゆくまで数字の練習から運算法に至るまで学び、修得した上で帰校されました。この事実を捉えて前掲『沿革誌』は、「聞く青戸教員の如きは、わざわざ上京して数学家に就き、幾十日もの間数字の練習から運算法に至るまで習得して帰校し、漸く児童に伝授するに至ったという。当時の教員が児童の教育にいかに困苦を尽くしたるか、想像するに余りあると同時に、小学校教師の開拓者先輩者として、大いに尊敬を払わずして可ならんや」と記したのです。片平学舎の古沢惣三郎先生も数字の習得には大変苦心されたお1人です。別掲は、先生が算用数字(アラビア数字)を使ってローマ数字の読み方の復習をなさったことを示す筆書きのメモです。

さて、下麻生学舎改め下麻生学校は、生徒のいたずらから翌明治 7 年に不動院を追い出され、一時王禅寺の久保倉家の物置に移りました。しかし県の勧告を受け、自前の校舍を建てようと 3 ヶ村の寄り合いを何度も開いて、王禅寺村と下麻生村の地境に建てることに決めたのです。明治 8(1875)年に棟上げまで済ませたのですが、幹部で合意した各村の負担割合について、村民の合意が得られず、工事は中断してしまいます。その後時間をかけて話し合った結果、2年後にようやく 3 ヶ村の合意が得られ、明治 10(1877)年 6 月 23 日に新校舎に移ることが出来たのです。

参考(森潤一編『柿生の教育の歩み』 (続<))



古沢惣三郎先生の手書き練習メモ
上のローマ数字に覚えたての算用数字(アラビア数字)で読みを書いたもの

日本の民間信仰 4

「米とまつり」

琴平神社宮司 志村幸男

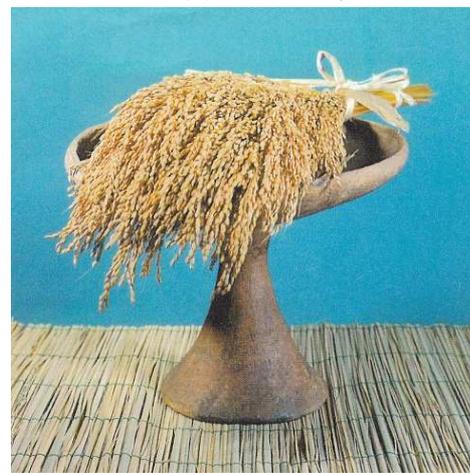
日本で米が盛んに栽培されたのは、弥生時代ですが、縄文時代後期の遺跡からも粃が出土していますので、今から二千数百年前から米を食べていたことが分かります。その頃から祭りらしき事を行っていたと推測されます。米は日本人の主食となっていますが、昨今様々な食材が増え、米の消費は減少しています。日本書紀の神代巻では、天照大御神が「吾が高天原にきこしめす斎庭の稲穂(ゆにわのいなほ)を以て、また吾児(みこ)にまかせつるべし」と仰せになり、皇御孫命(すめみまのみこと)の降臨に際して、稲穂をお授けになったことが記されています。高天原で育てられた穀物の種が皇御孫命「ニギノ命」により初めて葦原中津日(あしはらのなかつくに・日本)で栽培され、これが我が国における農業・米づくりの事始めとなったと記されています。

米を中心とした農業の中に、毎年・毎年この米が豊かに稔るよう祈る事は、必然的なことです。米の祭りは、春に「祈年祭」で五穀豊穰を祈ります。田植では、早乙女が色々の袖の晴着を装って早苗を植えます。そして夏は除災風鎮祭・虫送り神事が行われます。又雨が少ない時は「雨乞い」の祭りをします。真言宗の開祖空海も天長2年(824年)2月に、神泉苑で諸雨経法を修しています。そして田の神に豊作を願い、「田楽」などの芸能も奉納されます。この曲芸は、竹馬を一本竹にして、トントンと回り歩く「高馬」という芸であり大変人気を呼んだそうです。この高足から連想されたのが、豆腐を串に刺して頂く「でんがく」として生まれたのです。秋には、その収穫に感謝する「収穫祭」が行われます。春に祈念した願いが実現したものであるの稔りを頂くと人々は、様々な踊りや歌で歓喜を表わし、神事芸能が生まれ、これが固定化し、慣習化したものが郷土芸能として伝承されてきました。

そして米の収穫を祝う大切な祭りが、神嘗祭と新嘗祭です。まず伊勢神宮で全国からの初穂をお供えして神嘗祭を行います。毎年秋、天皇陛下は、その年の新穀を御祖先である天照大御神をはじめ神々にお供えし感謝を捧げる「新嘗祭」を宮中で御齋行になります。なかでも陛下が御即位後初めて行われる新嘗祭は、「大嘗祭(だいじょうさい)」と申し、国の平安と国民の安寧を祈られます。大嘗祭では、全国47都道府県の悠紀国(ゆきのくに=東日本)、主基国(すきのくに=西日本)の二カ所から選ばれた田の米をお供えします。令和は、京都府と栃木県でした。

次に「まつり」の語源について、大きく分け、3説があります。第一に、まつりの語源は、「まち」「まつ」と同義語であり、目に見えない神霊が、我々と接触し得る場所へ来るのを迎え待つ行為「お待ち」する意。第二に、マツリは、マツロフ(服従する)と同義語で、天皇の命令を受けて、臣下が各々の任務に仕えることを意味する神奉仕。第三に、酒食を以て神をおもてなしする間、一同で神前に「侍坐(はべる)」ことの意。この3説の「マツ」、「マツロウ」、「ハベル」の共通項は、すべて「神への奉仕」を内包したものと捉えられます。

私達日本人は、米から力を頂き、繁栄を頂いて参りました。これからも食に感謝し、すべての人達のご健康を祈念申し上げたく存じます。



新嘗祭に献上された初穂

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

11 **3月** 7・14・21・28日(毎日曜日) **4月** 3・17・24日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (緊急事態宣言が解除されない場合3月7日は休館です)

第19回 特別企画展

写真で見るふるさとの原風景

戦後における村々の変貌の過程や、各地の開発の様子など、柿生村地区村々の変遷の様子をお楽しみください。(新型コロナの影響で、開催期間を変更いたします。)

期間 3月28日(日)～7月25日(日) **会場** 柿生郷土史料館特別展示室

カルチャーセミナー並びに史跡見学会は、コロナウィルスの感染状況が継続的に下火になるまでお待ちください。早くても今年度下期になると考えております。